

## 大正期の新舞踊

吾妻 徳穂 西形 節子  
村松 道弥 市川 雅 (司会)

市川 出席の吾妻徳穂先生はニジンスキーの娘が書いている本の中で「私は吾妻に会っている」とあります。それはアヅマカブキが戦後ヨーロッパ・アメリカを公演したとき、ヒューロックという大プロデューサーが吾妻先生を各地に紹介した時のことだとも思いますが、大変国際的にも戦後直ぐに気を吐いていただいた方です。まず、西形先生の方から別表(61頁～63頁)をもとに大正期の新舞踊について、コメントをいただきたいと思います。

西形 村松先生のお話で大正期の新舞踊の動向は十分お分かりになったと思いますが、こちらの方は日本舞踊を中心にしています。前回の「近代舞踊の出発」では坪内逍遙を取り上げました。1904年(明治37年)『新楽劇論』を以て一大革新の口火を切った逍遙の壮大な理想はなかなか実現せず、過渡期の当用にと「お夏狂乱」などの小規模の舞踊劇を書き、文芸協会で試演していました。ところが大正2年、文芸協会の解散、逍遙は苦境にたたされ、新舞踊運動は挫折。それに代わって長谷川時雨が「舞踊研究会」で活躍をします。時雨は1879年(明治12年)生まれ、1905年(明治38年)懸賞戯曲に当選、女流劇作家として認められました。「舞踊研究会」の舞台となった紅葉館は時雨の母の経営で、当時、京舞の三世井上八千代(片山春子)や五世藤間勘十郎が出張稽古にきていました。第一回到尾上梅雄少年(六世勘十郎=勘祖)が出演。第二回には片山春子が「鉄輪」・五世勘十郎が「鷺娘」を踊っています。『演芸画報』を見ると、ともに素の形(地の髪、黒紋付きの着物)で、大正の舞踊家というより女師匠の様子が分かります。第四回は歌舞伎座に進出、六世尾上菊五郎・二世市川猿之助(猿翁)と新橋名妓連中も出演、新作「空華」などが発表されました。ここに逍遙の手紙があります。

「お返事申し上げ候 お申し越しの件 実に以てお安き御用には候えど 敗軍の将兵を語らずとやら 今は何の手助けもいたしかね候 先日の空華面白く拝見 そのうちお目にかかって所見はもうしのぶべし

時雨様 逍遙

(『逍遙研究』大村弘毅氏の論文より)

この時期、失意の逍遙と得意の時雨の対象がうかがえる資料と思います。

時雨は第五回に「江島生島」を発表。当時高額な二円の入場料を取った豪華な発表でしたが、大正3年六世菊五郎の「狂言座」発足以降舞踊を離れ、大衆作家三上於菟吉との恋愛、『女人芸術』の編集など文芸方面に活躍しました。時雨の舞踊運動は古典に重点がかかり新しいものへの限界はありましたが、一つの掛橋となったと思います。この時代新橋の大師匠として指導していらっしゃいました藤間政弥師は吾妻先生の母君、当時をよくご存知の吾妻先生から伺いたいのですが…

吾妻 長谷川時雨先生には、「清元お葉」と「芝金」という作品をかいていただきました。それをお願いにいったときは今の旦那様(三上於菟吉)とご一緒に、とてもさっぱりした方で「今主人をお風呂に入れるから冷たいものでも飲んで待っててちょうだいね！」旦那様がちょっと半身不随みたいだったんですね、たすきをかけてお風呂に入れてから“ごめんなさい！なにやるの？”って聞いて下さいました。それで私は二つの作品をいただいたのです。

西形 このように体験的なお話を交えながら、進んで参りたいと思います。さて、時雨は六代目菊五郎と「狂言座」をつくりませんが、二回で終わります。ここで逍遙の大作『新曲浦島』が上演されますが、全幕ではなく中の幕だけでした。時雨の作品は『歌舞伎草子』、これは後に「藤蔭会」で『出雲のお国』の題で藤蔭静枝(後に藤蔭静樹)が取り上げます。先程、村松先生のご講演にもありましたように、大正のはじめは洋舞の方に新しい展開があり、日本舞踊は逍遙の呼び掛けに対して今一つというところでした。そこに藤蔭静枝(静樹)が登場します。

吾妻 藤蔭先生は風靡しましたね。私の母より下の(勘翁の)お弟子さんでしたが、藤原義江の“どんとどんとどんと…”というあの頃はやっておりました歌「出船」で、まだ新橋の芸者のときに余興で踊ったんです。皆びっくりしましてね。うちの母も古いほうですから、また芸者の中でもいろいろありまして、やっぱり舞踊家で立ちたいということで芸者をお止めになったのです。そして永井荷風さんとご一緒になられて、それから新しいことを始められたのでしょうか。

西形 でも、永井荷風との結婚生活は短かったのでしょうか。一年足らずで…。

吾妻 晩年、私が何うと、一杯召し上がりながら“なんつっても永井荷風が好きなのよ”といっつもおっしゃってました。やっぱり、先生はよっぽどお好きだったんですね。私も何度かご一緒に藤蔭先生の会に躍らせていただきましたが、戦争（第二次世界大戦）が始まりかけた頃でしたか…お箏の伴奏で初めて公会堂で踊ったときのことです。先生は少しお歳を召したか振りを全然覚えていらっしやらないのです。私は覚えていましたが先生はどんどこんどこ振りをうめちゃうのです。私はもうびっくりしてこれは付いてゆくよりしょうがないと、一段どう踊ったか夢中でした。私の分まで踊ってしまいそうかと思うとチョンと座ってしまい“あなたの番よ”というんです。藤蔭先生はそういう方でしたが、とってもいい方でした。そして大変人間味のある先生でした。やっぱり新舞踊の元祖といわれる方ですし、藤蔭先生がお立ちになったから今日の我々があるのだと私は確信しています。

市川 吾妻先生のお母様は、藤間政弥さん、藤蔭静枝（静樹）に対しては批判的なところがあったのでは…

吾妻 はい、そうです。第一、お師匠さんの藤間勘右衛門（後に勘翁）に対して失礼だということです。それが勘右衛門さんの奥さんの遠い親戚になるとかで、割に自由に振る舞っておられました。私の母などは旧いほうですし、名取筆頭でしたから、だらしがなくなると怒りました。ピアノで踊るなんて踊りじゃないといっていた母でした。それが私のようなものができまして、舞踊家になりましたから母の生きているときから、ピアノで踊ったりいろいろしましたもので“世の中、変わったんだねえ…お前”といっておりましたから、自分の子によって時代が変化したことを認識したのだと思います。

西形 村松先生もおっしゃってましたが、おもしろいことに日本舞踊の三人の舞踊家が地方の出身であったとおっしゃってましたが…

吾妻 そう、藤蔭先生は新潟、珠実（初代五條珠実）さんが秋田、寿美（初代花柳寿美）さんが浜松でしたか…

市川 それから、三人に共通するのは芸者ということですね。

西形 それは村松先生もおっしゃっておられましたが、おさなくして上京されているので、吾妻先生がおっしゃるように江戸っ子的な気質を持っていたようですが……。しかし、シャイな江戸っ子にはないガムシャラなところがあったと思われま。藤蔭静枝（静樹）の業績をまとめると…

1. 藤蔭会という舞踊研究団体を作ったこと。
2. スタッフに良き同人を得たこと。田中良・福地信世・遠山静雄・町田博三（後に町田佳聲）

らが無報酬で協力。

3. 静枝自身モルモットとなり、若い同人が商業劇場に無い試作的な舞台装置・照明が得られた。
4. 舞踊家兼振付の先駆となった。
5. 本居長世の童謡運動に参加、童謡・民謡詩などに振付する。
6. 全国各地に旅公演、舞踊の普及活動。そのことは、先頃（1990年11月公演）の東京芸術劇場の柿落としの新劇団合同公演「東京行進曲」のモデルとなって登場。

後に、静枝は前記同人と別に、三田文学の勝本清一郎と親しくなり、作品の傾向も変わってきますが、昭和の初め、失恋してパリ留学したと聞きますが、村松先生、ごぞんじでしょうか？

村松 知ってますよ。勝本君は静枝の恋人でした。

西形 藤蔭静枝（静樹）に続いて、花柳徳次のちの五條珠実が『惜しむ春』でデビューします。この時に、作者の香取仙之助が“いささか野心的な新しい純舞踊として書いた。これまで新曲といっていた代わりに<新舞踊>という言葉を用いた”といっていますが、この頃から新舞踊が定着してきたのではないのでしょうか。そして別表（61頁～63頁）に書きましたように、1921年（大正10年）という年が大正期の新舞踊運動が一気に活発になるところだと思います。榎茂都陸平の『春から秋へ』藤蔭静枝（静樹）の『思凡』の話題作。そして前年発足した「春秋座」で二世市川猿之助（猿翁）がロシアンバレエに刺激されて『虫』を発表します。吾妻先生『虫』をご覧になりましたか？

吾妻 素敵ですね。今でもどっかで取り上げてやったらいいと思いますよ。虫の感じでひらひらしたものを着て、ちょっと洋舞に似ています。四季になっていまして冬にちんころがいっぱい出てくるんです。これはご兄弟三人で一猿之助（猿翁）さん・八百蔵（後に八世市川中車）さん・（市川）小太夫さん一素敵でほんとに目についています。

西形 当時の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞はじめ、都新聞、万朝報など、ほとんどが取り上げているのですから、『虫』はよほど話題になったのですね。また、歌舞伎役者がはじめて新しい舞踊に取り組んだということが冒険であり、偉いことですね。

市川 猿翁のそのあとの作品は？

吾妻 それと…なんという作品でしたか「釈迦と孫悟空？」あちらはもともと腰がいいでしょ。長い棒を扱いながら、降りたり上がったりなさるその舞台が素晴らしかったですね。

市川 今の話の中でディアギレフのロシアンバレエ団の事でちょっと…大正元年が1912年、その年にローシーがきているのです。ロンドンのアルハンブラ劇場のミュージックホールに在席していた

のですが、ディアギレフバレエ団があまりにも優勢であったがために、ミュージックホールは没落し、追い出されてローシーは日本にやってきたという…歴史の裏側にはそういう事実があるのです。三島章道編『ロシヤバレエ』という本が大正10年ぐらいにありますし、大田黒元雄の『ロシヤ舞踊』も大正6・7年には出ています。そのような背景がありまして、新舞踊運動にはロシヤバレエが影響しているということは事実であると思います。

**西形** それと、第一次大戦後の日本は軍需景気の活況という経済的な社会背景もあったのではないのでしょうか。それが次の「羽衣会」「踏影会」という贅沢な豪華な歌舞伎俳優による新舞踊という形になったのではないのでしょうか。これが大正11年から始まります。演目その他はパンフを参照していただき、実際にご覧になった先生がたからその模様を伺いましょう。まず、慶ちゃんの愛称で人気、美貌の女形五世中村福助の「羽衣会」は…  
**吾妻** 「水と鳥」では今の（中村）歌右衛門さんが子役の傷付いた鳥で、カーテンの前を福助さんがビーズの付いた豪華な衣掌を着てさーっと通るのですが、その時代にビーズという目を見張ったものですが、それがチカチカ光って…それにオーケストラですから大変な費用でしたでしょう。

**西形** 劇界の大御所といわれた五世中村歌右衛門を父に持つ福助の「羽衣会」は、舞台美術を各幕ごとに高名な画伯に依頼するなど、当時のサラリーマンの月給にも匹敵する10円の入場料が売り切れても赤字だったというほどの贅沢な発表会だったそうです。山の手風といわれた「羽衣会」に対し、「踏影会」はどちらかといえば下町風ですが同じく美しい若女形のアイドル尾上栄三郎の会。栄三郎は六世尾上梅幸の息子、六代目菊五郎も応援また、美貌の立役若手の市川男女蔵（のち三世市川左团次）も参加しました。『演芸画報』の写真から当時の舞台を思い出していただきましょう。写真を見ても当時としてはずいぶん奇抜ですね。この「抱影」など洋舞のタイト姿で水に移った月を掬い取ろうとする踊りのようですが…  
**吾妻** 実際にそうでした。それと「刺客」六代目菊五郎もでたのですが、音楽がダダダダダト…とこんな感じだったんです。今でも耳についています、とっても面白くて…こんな踊りもあるんだなあと思って、素敵でした。

**西形** 大正12年の春、「羽衣会」「踏影会」ともに第二回を催しますが、その年の9月、関東大震災に見舞われ、これでほとんど終わってしまいます。「羽衣会」は震災後も第三回の公演をしますが、まもなく栄三郎も福助も若くして亡くなります。それにしてもこうした派手な会は経済的にも続かなかったのではないのでしょうか。

▼「蟲」二世市川猿之助（猿翁）（大正10年11月明治座、「春秋座」第二回公演）



**吾妻** でもおできになったでしょう。梅幸さんの方はどうか判りませんが歌右衛門さんちは出来ましたでしょう。栄三郎さんがお亡くなりになりさえしなければ…。

**西形** 一見華やかで豪華な歌舞伎俳優の新舞踊運動は花火のようで、自身の内面的な欲求からではなく準備もないままに立った芸の道楽だという評もあったようです。逍遙の言葉に「一時的より持久的に、公演の前に二回試演せよ。一年半は公演をするな」とありますが…内容はいかがだったのでしょうか？

**吾妻** でも私たちは、何と素敵なおことをやっているのだらうと羨ましく思いました。私はまだはっきりした舞踊家になっていませんでしたけれど。

註一この頃、吾妻徳穂は帝劇女優八期生として修行時代。

**西形** 関東大震災によって一つの時代が終わりを告げ、やがて新しい担い手が登場します。大正13年の「花柳舞踊研究会」のスタートに始まり昭和に入って新舞踊のスターたちが一斉に活動を始めるのですが、これは次の機会にいたしまして…。

**市川** そろそろ時間も迫って参りましたのでこの辺で…今日は久しぶりに吾妻先生から昔の下町の東京弁を伺いまして、僕は大変嬉しく思っております。とても二時間では語り尽くせない大正期の新舞踊ですがこの辺で終わらせていただきます。

（文責・西形節子）